防災セミナー　12年のあゆみ

公益社団法人 愛知建築士会 女性委員会

回	開催年度	タイトル	講師	専門（当時）	内容
1	2011年 （平成23）	東日本大震災に学び明日に活かす	福和伸夫	地震工学	・住んでいる土地の危険度を正確に把握すること。 ・安全でないと判断した場合、移動する、対策をとるなどの手当をすること。 ・設計者は利用者が自ら維持管理がしやすい「強・用・美」を備えたデザインを心掛けること。
2	2012年 （平成24）	不都合なことを考える ー濃尾地震後の建築界の対応から学ぶこと	西澤泰彦	環境学	・濃尾地震後の耐震研究で伝統的家屋は和小屋による屋根と建物の一体化が強いことが判明。 ・121年前の木造の耐震化は筋違、柱と基礎を一体化する土台、金物補強の技術で現在とあまり変わりがない。 ・関東大震災後、RC造、S造の技術は進んだが木造は停滞したままで、阪神淡路大震災で多くの被害が発生した。
3	2013年 （平成25）	帰宅困難者対策とこれからの都市防災	廣井悠	都市防災	・大都会では帰宅困難者があふれると、救急車や消防車が動けない、備蓄食料がなくなるなどの問題が起こる。 ・帰宅困難が起こることを前提にした対策やルール作りが必要。 ・災害に対するイメージを養い、シミュレーションをしたり、多様な選択肢を考えておくことが大切。
4	2014年 （平成26）	南海トラフ巨大地震・津波に備えて ～愛知県では～	川崎浩司	海岸工学	・津波伝搬速度や高さは水深と地形に影響される。東日本大震災では東海地方への到達時間は3時間、津波高さ１ｍ。 ・名古屋にはゼロメートル地域があり、伊勢湾台風後整備されたが津波発生後のことまでは配慮なし。 ・木造住宅では津波高さ１ｍでも部分破壊、2ｍでは全面破壊するので軽視できない。 ・家具の下敷き防止、出口が塞がれないよう、避難通路の確保の重要性をもう一度確認を。
5	2015年 （平成27）	ライフライン防災　～備えと対応～	北野哲司	自然災害科学 防災学	・ライフラインの復旧速度は上がってきたが、必ず数日間の空白が起きる。その間何をすべきか？ 　→①人命救助②活動拠点の確保・設営③避難所、自らの組織・体制整備、受援準備が必要。 ・ライフラインの地震対策は構造的損傷と機能的損傷のふたつのリスクの減少が重要。 各地で耐震性管路への取替が進んでいるが状況は自治体によりさまざま。
6	2016年 （平成28）	避難所での女性への配慮 ～建築士が避難所でリーダーシップをとるために	阪本真由美	防災危機管理 防災教育 被災者支援	・災害における人的被害には「直接死」と「災害関連死」があり、熊本地震では「災害関連死」の方が多かった。 ・避難所が無法地帯状態になり、トイレの衛生管理不備など生活の肉体的精神的疲労が原因。 ・女性の参画が遅れていることが原因の一つで、うまく行っているところは女性の声を反映していた。
7	2017年 （平成29）	いざというとき建築士だからできること ～合い言葉は命・支え合い・自ら動く～	近藤ひろ子	防災教育	・まず守るべきは「人命」 ・いつどこで遭うかわからない自然災害は、季節・場所・時刻を問わず、「想定外」のことが必ず起きる。 ・被災地では「中学生」「小学生」が活躍。防災訓練を着実に経験しており、臨機応変に行動する。
8	2018年 （平成30）	高めよう心の減災能力	松本真理子	臨床心理学	・心理的危機から回復するために必要なのは、衣食住といったインフラの整備による安心安全の保障、他者からの サポート、自分でストレスへの対処法を知り自己コントロール感を回復すること。 ・ストレスから回復するために「10秒呼吸法」など心の減災能力を高める方法がある。 ・ストレスからの自己回復力の向上は災害時だけでなく、自尊感情の向上・自己肯定感の向上にも繋がる。
9	2019年 （令和元）	過去を知り未来に備える ～先人は災害をどう乗り越えてきたか～	武村雅之	地震学	・関東大震災で火災の延焼を促進したのは家財道具。 ・災害の際に湿地や埋め立て地は被害が大きかった。堤防などの科学技術により土地利用が進んでいるがひとたび 災害で破壊損傷すれば負の遺産となり復興を阻害する。過度な期待と妄想はそろそろやめよう。 ・人口減少の日本において次の世代に負の遺産を残さないことを真剣に考えるのが現代の「防災」。 ・人間は予測が苦手なので災害を「防ぐ」ことは無理。被害をなるべく小さくするように対策をする。
10	2020年 （令和2）	過去の災禍に学ぶ ～災害と感染症の深い関わりを学ぶ～	福和伸夫	地震工学	・過去を振り返ってみると、疫病と災害がほぼ同時期に発生しており、それを転機に政治が大きく動いてきた。 ・25年前の阪神淡路大震災の時より今は国力が低下している。経済優先思考、個人的営利に流されているから。
11	2021年 （令和3）	復興10年　大船渡の声を聴く　建築士に望むこと	齊藤賢治	大船渡津波伝承館館長	・日頃から地震だ、津波だ、で避難を徹底していて、そのおかげで皆助かった。『津波てんでんこ』 ・復興は徐々に進んでいるがまだ発展途上。復興住宅は断熱性に課題がある。大船渡の方達の気概に感銘を受けた。 ・これらのことは未来の子供達につたえていかなければならない。
12	2022年 （令和4）	不安定社会における住まいまちづくり	大月敏夫	建築計画	・避難所からの移動先としての急ごしらえの仮設住宅は、住むための「家」しか建っていない。 買い物には危険な道路を2キロも出かけなければならない。 結果この環境では生活できず、公園にテントを張って生活している人もいた。 住宅を中心に「生活環境」もデザインしていかないと生活は持続できない。